

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	マイノリティーから見る歴史 : 村上春樹「羊をめぐる冒険」
Author(s)	山根, 由美恵
Citation	Problématique , 5 : 156 - 169
Issue Date	2004-07-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047496">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047496</a>
Right	
Relation	



# マイノリティーから見る歴史

——村上春樹「羊をめぐる冒険」——

山根 由美恵

Yumie YAMANE

はじめに

驚田清一氏は「時代のきしみへわたし」と国家のあいだ」(平14・5、ティビーエス・ブリタニカ)で、次のように述べている。

ひとは時代を拒否し、時代から遁走しようとするだけ、より緻密に時代に絡まれてゆく。じぶんがそこから出たい、下りたいと願っていた時代に、いよいよじかに包囲されることになる。法律や制度、習俗や縁、そういった生の背景がもはや背景ではすまなくなるからだ。が、そういう拒否や遁走にまでつきまとう、おそらくは記憶にすらとどめられていない背景というものがある。わたしたちの個々の存在を編んでいる意味の糸、個々の存在が憑かれていく象徴の網、それらはある係数をもって思考をたわませ、欲望のかたちを象り、感情のきめを作りたい、記憶を彎曲させ、他者との縁というものを紡ぎだす……。言ってみれば、思考や感情や欲望の土台もしくは空間に刻み込まれた「觀念」とでも言うべきものであって、それがじつは、わたしたちの存在を貫通するあらゆるシステムのみならず、そうしたシステムの貫通や包囲をかわそうとするその抵抗のスタイルをも規定していることは、だれもが苦々しい思いをもって認めざるをえない。その意味で、時代を拒否するとは、ほとんどじぶんの存在を脱臼させるにひとしい。

「拒否や遁走にまでつきまとう、おそらくは記憶にすらとどめられていない背景」、「わたしたちの個々の存在を編んでいる意味の糸」。私なりに解釈するならば、人間は無意識のうち何かに縛られており、その糸は個人の想像を越えて、様々なものと繋がっている。そして、そうした背景は、否定・拒否を試みたときに前景化する。驚田氏の言説を用いて私がここで試みたいのは、村上春樹という作家もこういった背景を自覚しつつ、その上でテキストには「抵抗のスタイル」の模索があることを、浮かび上がらせることである。

村上の、特に初期テキストは、その「都市」性が注目され、柄谷行人氏の「歴史的意識のあらわれではなくて、その空虚化をめざすものである」との言に顕著なように、時代の空虚さを表す作家として捉えられてきた。しかし、「空虚化」ですら関係の網目から抜け出すことはできない。

「羊をめぐる冒険」には、次のような場面がある。

僕は待合室の火の点いていないストーブの前に座り、次の列車が来るまで彼女に十二滝町の歴史を聞いて話した。年号がややこしくなったので、「十二滝町の歴史」の巻末資料をもとにノートの白いページを使って簡単な年表を作った。ノートの左側に十二滝町の歴史を、右側に日本史上の主な出来事を書き込んだ。なかなか立派な歴史年表になった。

たとえば一九〇五年／明治二十八年には旅順が開城し、アイヌ青年の息子が戦死していた。僕の記憶によればそれはまた羊博士の生まれた年でもあった。歴史は少しずつどこかでつながっていた。

「なんだかこうしてみると、日本人って戦争のあいまに生きてきたみたいね」と彼女は年表の左右を見比べながら言った。

「みたいだね」と僕は言った。

「どうしてそんなことになってしまったの？」

「ちよっと複雑なんだ。ひとことじゃ言えない」(第八章2)

右は、主人公「僕」が特別な力を持つ「羊」と友人「鼠」を北海道の十二滝町に探しに行く際に、「十二滝町の歴史」を同行の「耳の女」に説明する場面である。この「僕」の行動は、依頼者である黒服の秘書によってプログラムされている筋書き(運實重彦氏の言う、宝探しの物語)ではあるが、図らずもそれは戦争にも密接に関わるように描かれている。なぜ、この場面に戦争が関わってくるのか。

本稿では、「記憶にすらとどめられていない背景」、「わたしたちの個々の存在を編んでいる意味の糸」が、マイノリティー(アイヌの青年・羊男)という存在によって浮かび上がってくるテキストの構造を明らかにする。そのことは、時代に絡め取られている人間の一人である作家の「抵抗のスタイル」の模索であり、現代の物語を考える上で一つの示唆があるものと考えられるからである。

まず、テクストの構造を考えていきたい。主人公「僕」は、「鼠」から預かった「羊」の写真をPR紙に載せたところ、大物右翼（先生）の秘書の目に留まり、彼の要請によって「羊」と「鼠」を探しに行く。「羊」探しの過程で、「先生」、「先生」の黒服の秘書、羊博士、「十二滝町の歴史」に登場するアイヌの青年、羊男といったものと関わる。

既に、坪井秀人氏が指摘しているように、「羊をめぐる冒険」の設定には、ロッキード事件が色濃く影を落とし、「先生」は児玉誉士夫を模した右翼の黒幕となっている。物語の「先生」は、「血の気だけは多くていつも日本刀をふりまわして、といったタイプさ。たぶん字だつてロクに読めなかつたはずだ」（第六章2）と卑小化されている。「先生」が「羊」に操られている傀儡として裏世界の王国を築いたという設定により、モデルを想起できる政治を裏から動かしてきた人物と、戦後の国家の価値を転倒させていることがわかる。

こういった戦後批判は、「先生」の黒服の秘書・羊博士にも見ることができ、黒服の秘書は日系二世で、スタンフォード大学の現代のエリートである。彼は思想を後回しにして形だけ取り入れようとした日本の近代に関して批判の目を向けており、日本における一般的な羊と日本の近代とをその「空虚さ」という点で一致させている。その上で、個の認識と言語の否定を行う。

羊博士は、仙台の旧士族の長男として生まれ、神童として育ち、東京帝国大学農学部に入學した。大学入学後も学業優秀であり、首席で卒業し、農林省へ入省した。羊博士の経歴は、近代の立身出世主義に基づく典型的なエリートとして造形されている。この近代のスーパーエリートが「羊」と出会うことによって転落し、その後、激しく中央を批判する人物として登場する。その批判は、アジア蔑視と思想性の欠如が中心である。

こうした設定自体に時代を意識している姿勢が窺えるが、テクストには戦後状況のみでなく、明治から戦後までの近代の時間が戦争を機軸として織り込まれている。そして、右翼の大物やエリートといったマジョリティーだけではなく、マイノリティーの視線も描かれている。ここに注目してみたい。「羊をめぐる冒険」に描かれている出来事を編年体に戻すと、次のようになる。

アイヌの青年は、物語のクライマックスの舞台となる十二滝町を開拓した一人である。しかし、明治三十八年に息子が日露戦争で戦死することで性格が変わり、孤独な死を遂げていく。羊博士はアイヌ青年の息子が戦死した年に生まれた。エリート官僚となつた彼に陸軍が中国北東部へ緬羊を要請し、その地で羊博士は「羊」と遭遇する。そして「羊」に一時的に乗り移られ、日本への輸送機関として使われた。「羊」が離れた後、羊博士は十二滝町で牧羊しながら「羊」を追い求める。十二滝町で羊博士が牧羊を始

めた時期、十二滝町生まれの「先生」は「羊」に利用されながら右翼のトップに躍り出る。一方、十二滝町生まれの羊男は戦争に行きたくなかつたため、羊の皮をかぶり、ついには人間に戻れなくなる。太平洋戦争が終結し、羊博士の牧場は米占領軍の演習場として接収され、昭和二十八年に「鼠」の父親が別荘として買い求める。そして、テクストの現在である昭和五十三年、「先生」によって裏の王国を築いた「羊」は、十二滝町の牧場に来た「鼠」に取り憑こうとしていた。

物語は、一九七八年（昭和五十三年）に生きている「僕」が「羊」を探しをすることにより、歴史とそれを動かす背景を前景化し、「歴史は少しずつとこかでつながっていた」と構成されている。その結末として、「先生」は病死、「鼠」は自殺し、あわせて「羊」も消滅、黒服の秘書は「鼠」の仕掛けた爆弾の爆発でおそらく死亡した。そして「僕」だけが残された。つまり、テクストは様々な立場から社会や歴史に対する批判・皮肉が描かれているが、この問題を解決しうる可能性のある価値観は残されず、それらが消滅していく様が描かれている。この姿勢は、柄谷氏の言う、歴史の「空無化」をめざしていると言えるかもしれない。

しかし、アイヌの青年と羊男という存在は看過できないものがある。「先生」、黒服の秘書、羊博士ら三人は、知識人という立場から近代の空虚さ・思想性の欠如を批判し、「羊」を絶対の価値としている。対して、マイノリティーであるアイヌの青年、羊男らは、「羊」に価値を置いていない。そして、彼らは消滅していない。これら二人のマイノリティーの存在を追っていくことにする。

### ■ マイノリティーの視線 ― アイヌの青年 ―

アイヌの青年は、「僕」と「耳の女」が十二滝町に向かう際に読む「十二滝町の歴史」の登場人物である。作中作である「十二滝町の歴史」には、かなりの分量が割かれ、その大半はアイヌの青年の話となっている。この歴史書には、アイヌ青年の死も描かれているが、この物語では、消滅という形ではなく、別の役割を与えられている。それは、歴史書として描かれ、それを「僕」が読むという行為によって現前化され、追体験されていることである。

アイヌの青年は、「アイヌ語で『月の満ち欠け』という意味の名前」を持つ人物で、「たぶん躁鬱症の傾向があったのではないかと著者は推察している」（第八章1）と注記されている。この躁鬱病のためにアイヌ部落から孤立していたと予想される青年は、明治十三年に借金取りから逃れて北海道に渡り、そこで開拓を望む日本人の農民達と行動を共にし、彼らに北海道で生き延びる様々な術を教える。そのことにより、「人々は青年を認めるようになり、青年も自信を回復した。彼は後に開拓民の娘と結婚し、三人の子供を作り、日本名を名乗るようになった。彼はもう『月の満ち欠け』ではなくなったのである」（第八章1）。ここには、アイ

又青年が新しい共同体に自分の居場所を見つけ、自らのアイデンティティを確立してゆく様子が窺える。

歴史的事実の上から言えば、この頃の北海道では明治政府の同化・皇民化政策が進められ、様々な悲劇が生まれていた。<sup>(6)</sup>土地の所有概念がなかったアイヌからの土地没収、樺太・千島に住むアイヌの強制移住、アイヌ文化を「陋習」としてこれを禁止、更には、肉食であったアイヌ民族を肉食へと変更させた。これによって、アイヌの人々はタンパク質不足になり、加えて内地から伝染した病気に対する抵抗力がなかったため、人口が半減したと言われている。この状況に政府は「北海道旧土人保護法」(明治三十二)を制定し、「保護」を行おうとした。しかし、この法は農耕民族化の強制と皇民化教育の施行を目的とするものであり、「保護」という名目による更なる規制となって、土地を失い、悲惨な状況へ追い込まれるアイヌは跡を絶たなかった。対してテクストは、アイヌ青年のアイデンティティが、アイヌ民族と日本人とが互いの存在を尊重しあう共同体の成立過程と絡み合って描かれている。アイヌ青年が「日本名を名乗る」ことも、ネガティブな「月の満ち欠け」というアイヌ語からの脱却の姿として肯定的に扱われている。いわばこの共同体は、歴史的事実に反した夢物語と言えよう。

しかし、この理想的な共同体は近代化の波に呑み込まれていくことになる。

もちろん不快な出来事もないではない。役人がしばしば姿を見せ、税の徴収と徴兵を行うようになった。それをとくに不快に感じたのはアイヌの青年(彼はその頃もう三代半ばになっていた)だった。彼には納税や徴兵の必要性がどうしても理解できなかったのだ。

「どうも昔の方が良かったような気がするな」と彼は言った。

それでも村は発展しつづけた。(第八章1)

発展に伴い、税の徴収と徴兵が行われた。村が発展するにつれ、マイノリティの立場から青年は違和感を感じる。ここには、アイヌ青年の目を通して、共同体が近代化への道を進み、国家に隷属されていく様子が批判的に描かれている。そして、日露戦争が迫りつつあった村に、政府が大陸進出のための綿羊飼育を推奨する。アイヌ青年は「人口増加に伴って急激に入り組み始めてきた村の集団生活にうまく馴染めない状況から、村を離れその責任者として牧羊を始める。

日露戦争が始まると村からは五人の青年が徴兵され、中国大陸の前線に送られた。(中略)戦死者の一人は羊飼いとなったアイヌ青年の長男だった。彼らは羊毛の軍用外套を着て死んでいた。

「どうして外国まででかけて行って戦争なんかするんですか？」とアイヌ人の羊飼いは人々に訊ねてまわった。その時彼は既に四十五になっ

ていた。

誰も彼の問いには答えはくれなかった。アイヌ人の羊飼いは村を離れ、牧場にこもって羊と寝起きを共にするようになった。(第八章1)

息子が彼には理解しがたい「徴兵」に取られた上に、自分が育てている羊毛の軍用外套を着て戦死した。アイヌ青年には戦争の意味が全く分からない。彼は絶望し、性格も変わり、孤独な死を迎えた。

なぜこのようなアイヌ青年が描かれたのだろうか。歴史的事実としては、北海道における徴兵制の施行は、明治十年、函館・福山・江差に始まり、明治二十九年に石狩・後志・渡島・胆振に拡大、明治三十一年、全道に至る。このうち、アイヌ民族は明治十九年に初めて徴兵され、日露戦争を迎えた。

小川正人氏は、日露戦争に出征することで和人と同等となったと喜ぶアイヌや、武勲を立てた「北風磯吉」らをマスコミが取り上げ、教育の成果によってこの名誉が与えられたと喧伝したことに注目しながら、それらがアイヌ民族に対する学校教育の更なる必要性を政府とアイヌ双方が求める方向に繋がった過程を詳しく論じている。日露戦争への徴兵・出征は、政府の皇民化政策に大きな役割を果たしたのである。しかし一方には、徴兵忌避をした者や日本人の都合のよいように使われていることを見抜いていた人物も存在していた。小川氏はそうした人物にも触れ、過酷な生活を余儀なくされたアイヌの実態に目を向けつつ、論を展開している。

アイヌ民族の悲劇は、維新後の悲惨な状況など様々な形があった。テクストには、日露戦争に巻き込まれた悲劇が取り出され、物語が作り上げられている。つまり、ここには悲劇の選択があり、理想的だった共同体の一員が、戦争によって運命を狂わされていく姿が強調されている。共同体の設定が夢物語であるがゆえに、その後の悲劇との落差がより際立つ。このアイヌ青年の物語は、歴史に埋もれていた反戦の立場のアイヌを描いたものである。そこからは、歴史の本流から外れた、弱い者の視線からの戦争そのものへの疑問や矛盾が、今一つの「歴史」として浮かび上がっている。

更に、この悲劇は、歴史書として描かれ、それを「僕」が読むという行為によって、現前化されるに留まらない。「僕」たちはこのアイヌ青年達が辿った同じルートを通して「鼠」がいる牧場に向かう。

我々は旭川で列車を乗り継ぎ、北に向って塩狩峠を越えた。九十八年前にアイヌの青年と十八人の貧しい農民たちが辿ったのとは同じ道なのである。(第八章2)

「ここはいわば中継地点なんだよ。ここで最初の開拓者たちは東に向きを変えたんだ」(第八章2)

たとえば一九〇五年／明治三十八年には旅順が開城し、アイヌ青年の息子が戦死していた。僕の記憶によればそれはまた羊博士の生まれた年でもあった。歴史は少しずつどこかでつながっていた。

「なんだかこうしてみると、日本人って戦争のあいまに生きてきたみたいね」と彼女は年表の左右を見比べながら言った。(第八章2)

これらから、「僕」が〈羊〉探しのクライマックス(「鼠」との再会)に向かう過程で、「十二滝町の歴史」を追体験していることを意識していることがわかる。「僕」はアイヌの青年と同化し、近代化の矛盾と戦争の悲劇を把握しながら十二滝町に乗り込むのである。歴史書に記されること、そしてそれを読む人によって、その歴史が追体験されていくということ。これが作中作である「十二滝町の歴史」の持つ役割であり、マイノリティーから見ると歴史が描かれていると言える。

アイヌ民族の悲劇の中から、戦争に巻き込まれた悲劇を取り出した作家の指向は、羊男というもう一人のマイノリティーにも現れている。

#### ■ 徴兵忌避者 — 羊男 —

IV

「僕」たちは牧場へ着いたものの、そこには「鼠」も〈羊〉もいなかった。その代わりに「僕」の前に現れたのは羊男であった。羊男は、「鼠」の霊媒である。後に、この物語の続編とも言える「ダンス・ダンス・ダンス」においては「僕」の半身として登場している。そのことから、分身的な役割を担う存在として考えられてきた。

しかし、次のような会話を交わす羊男は、「僕」の分身的な存在としてのみ捉えることができるだろうか。

「どうしてここに隠れて住むようになったの？」(中略)

「誰にも言わない？」

「誰にも言わないよ」

「戦争に行きたくなかったからさ」(中略)

「どこの国との戦争？」と僕は訊ねてみた。

「知らないよ」羊男はこんこんと咳をした。「でも戦争に行きたくないんだ。だから羊のままにいらんだ。羊のままにここから動けないんだ」

「十二滝町の生まれかい？」

「うん。でも誰にも言わないでくれよ」

「言わないよ」と僕は言った。「町は嫌い？」

「下の町かい？」

「うん」

「好きじゃないよ。兵隊でいっぱいだからね」羊男はもう一度咳をした。

「あんたはどこから来た？」

「東京からだよ」

「戦争の話は聞いたかい？」(第八章8)

羊男は戦争から逃げたかったため、羊の皮をかぶって生活している徴兵忌避者なのである。

加藤陽子氏は徴兵忌避について、国家と個人の重要な問題として次のように述べる。

カントがいうように「人を殺したり人に殺されたりする」ために一個の人間が国家に雇われることは、個人の人格における人間性の権利とおよびよ調和しない側面ももつ。ここに国家と個人の間の緊張関係の最たる事例として、徴兵忌避という問題がクローズアップされる理由がある。

菊池邦作氏は徴兵忌避の歴史を三つの時期に分け、徴兵忌避に通底する精神を「人間が、その生命の尊厳を侵されようとするとき発生する極めて自然にして、自己に忠実な意思の表現であって、それは人間として誇るべき行為であった」と論じ、人間の尊厳との関わりを強調している。両者が述べるように、徴兵忌避自体に人間としての尊厳を守るための個人と国家との問題が絡む。

ただ、羊男には自己の行動を分析、内省しようとする態度は皆無で、その行動原理は極めて本能的である。羊男は、近代国家の国民であるために科された徴兵を、人間を捨て羊になることで拒否する。そこには寓話的設定によりつつ、国家からの逸脱が語られている。

寓話的設定により問題の本質が臚化されるとは限らない。むしろ寓話的設定は、村上文学の重要な特徴である。後に村上は徴兵忌避者という主題の代表的作品である丸谷才一「笹まくら」(昭41・7)に対し、その最も重要な核を「変身」であると捉えている。

この作品は、現代（一九六〇年代後半）という視点から語られるために、時間系列がミステリアスに（もちろん意識的に）錯綜しているのですが、クライマックスは浜田庄吉が杉原健次になりきるシーンで終わっています。（中略）本来であれば、浜田庄吉が杉原健次になる儀式というの、小説のもっと前の方に出てこなくてはなりません。そうすることによって、逃亡者＝杉原健次という人間の変換されたリアリティーが、読者の前により明確になるわけですから。

しかし作者はそのリアリティーをある程度犠牲にしてまで、この変身シーンをじつと最後までとって、おいて、いるわけですか（引用者注 傍点原文にあり）。これはどうしてか？ 言うまでもなく、この変身のすさまじさが、作者にとっても、小説にとっても、もっともリアルで、もっとも重要なものだったからですね。

「笹まくら」の主人公浜田庄吉は、太平洋戦争の最中、徴兵を忌避するために杉浦健次と名を変えて逃亡する。彼はその理由を「人間としての自由を持ち続けるため」と説明しながら、それが軍隊に対する生理的な嫌悪感を正当化するための自己弁護にすぎないという疑念にも駆られていた。

同じ徴兵忌避者でありながら、羊男は対照的である。そこには、人間性を守るために徴兵忌避をしたにもかかわらず、人間を捨てざるを得なくなってしまうというパラドックスが含まれている。「笹まくら」において捨てられたのは「市民」であったが、羊男は人間であることさえ捨てているのである。ここに「変身」の大きな意味があり、近代国家の徴兵制と戦争に対する「人間」の存在性をめぐっての強い問題提起がある。

そして、羊男の最も重要な役割は「鼠」の霊媒となることである。羊男は「僕」と死者である「鼠」との会話を成立させる媒介であり、物語のクライマックスをお膳立てするキーパーソンである。「鼠」は「羊」に取り憑かれていたが、自らの意思を持ち続けるために闘っていた。羊と人間双方の要素を持つ羊男が、「羊」と自らの自我との混在に苦しむ「鼠」の媒介となる必然性はここにある。

「十二滝町の歴史」にはアイヌ青年を主題化しながら戦争の悲劇を語っていたこと、その「歴史」を追体験した「僕」が十二滝町にやってきたことと、十二滝町生まれの羊男の徴兵忌避の問題とは地続きであると言える。アイヌ青年も羊男も十二滝町の人間であり、戦争によってその運命を大きく変えられた人物である。テクストの構造としてある宝探しの物語から、マイノリティー（アイヌ、徴兵忌避者）の視線を通じて本流の歴史とは異なった歴史が浮かび上がる。

1970/11/25

これまで、構造としてある宝探しの物語から、マイノリティーの視線を通じて、歴史がつながっていく様相を述べてきた。ここで少し視点を変え、「羊をめぐる冒険」の第一章に目を向けてみたい。第一章は、「羊」と「鼠」を探しに行く前のプロローグとなっているが、題として三島由紀夫の割腹自殺の日付（1970/11/25）が付されている。八年前、何かを抱え込み、「奇妙に絡みあった絶望的な状況」にあった二十一歳の「僕」は、三島由紀夫の割腹自殺という大事件を「午後の二時で、ラウンジのテレビには三島由紀夫の姿が何度も繰り返し映し出されていた。ヴォリウムが故障していたせいで、音声は殆んど聞きとれなかったが、どちらにしてもそれは我々にとってはどうでもいいことだった」と無視する。

ただ、同じ章に「一九七〇年十一月二十五日のあの奇妙な午後を、僕は今でもはっきりと覚えている」と八年後の現在まで強く残っている記憶として語る姿勢もある。三島の自殺の日付を付けられた章から始まっているこの物語は、「先生」を機軸にして「羊」を探しに行くという展開を見せ、「歴史は少しずつどこかでつながっていた」というように、近代の歴史、特にマイノリティーの悲劇と繋がっていく。つまり、三島の事件は、この物語で語られる歴史の出発点として位置づけられていることとなる。「僕」は、八年前（一九七〇年）当時は、三島の死など自分の人生に何の関わりもないと思っていた。しかし、「羊をめぐる冒険」を体験して、「僕」という個と歴史には様々なレベルでつながりを持っていると理解するようになる。「どうでもいいことだった」と記しながら、テクストは歴史を掘り起こしていく構造となっていることが、第一章から見えてくる。

この問題意識を作家に還元するならば、村上は三島の自殺の年である「一九七〇年」を、次のように語っている。<sup>12</sup>

我々のことを「全共闘世代」と簡単に呼ばれることにはかなり抵抗があります。我々はたしかに「全共闘」という形をとって噴出した時期を誇っているけれど、僕自身の感じでは我々の世代にとって最も重要な部分はその地下マクガマの養成期に含まれているんじゃないかという気がするんです。つまり六〇年代前半・中盤の高度成長とそれに伴う「戦後体制」の崩壊ですね。「全共闘」というのはたしかに様々な要因を含んでいるけれど、その究極的な意味は「戦後体制」とその価値観の消滅ということにあると思います。我々はその消滅をネガで捉えるかポジで捉えるかということ個別にかなり混乱していたし、そのせいで分裂し、圧殺されたわけですね。そして一九七〇年というポイントで我々は瞬間的に冷凍されてしまったと思うんです。

村上がこだわっているのは、一九六〇年代に「戦後体制」が崩れ、その価値観が消滅し、そこから起きた混乱を個人がどのよう

に捉えるかということのようである。非軍事化・民主化を軸とし、平和国家をめざした戦後改革は、高度成長により経済発展に最も力が注がれ、国家の理念は後回しにされていった。「全共闘」とは、それに反抗しようとした動きであるが、鎮圧されたことで、理念や思想の凍結・空白状態が加速してゆく一つのターニング・ポイントともなった。「一九七〇年」というポイントで我々は瞬間的に冷凍されてしまった」という言葉から、作家が一九七〇年を互換不可能な特別な年と捉えていることがわかる。この互換不可能な一九七〇年から掘り起こされる歴史の内実は、強い価値観の消滅の過程と、戦争に巻き込まれたマイノリティーの悲劇であった。そこでは一見何の関わりもない個と個が結びつくことが強調されている。換言すれば、価値観が冷凍された時点から、「記憶にすらとどめられていない背景」、「わたしたちの個々の存在を編んでいる意味の糸」が浮かび上がり、一個人としての生と歴史をもう一度見つめ直す作業が行われている。

#### ■ おわりに

「羊をめぐる冒険」は、一九八二年八月に発表された。一年後に刊行された堀幸雄「戦後の右翼勢力」(昭58・6、勁草書房)には、次のような記述がみられる。

今日(引用者注 一九八三(昭和五十八)年)、中曽根内閣はますます右傾化の度合いを強めているように見える。それは中曽根首相個人の資質によることも多いが、それだけでなく、日本全体が右傾化していることが大きいように私には思われる。われわれは、敗戦によって、今後、一切の武力を放棄し、平和国家をつくることを誓ったはずであった。そしてそれはまた戦前の天皇制国家からの訣別でもあった。しかしわれわれの改革はつねに中途半端であったように思われる。明治維新がそうであったし、戦後改革もそうであった。改革を中途半端に終らせたものは、多くの原因があったにせよ、その一つは保守勢力であり、その中途半端な改革が、右翼勢力の復活を許した。もちろん、明治初期に生まれた右翼は、西欧の右翼と異なる特異な発生形態をとってきた。それは日本人の精神の在り方と深く関わっている。(あとがき)

〈羊〉の正体は、近代の歴史と戦争とに深く関わっていた。これまで最も問題とされてきたのは、〈羊〉が何を意味するかということである。論者らは何らかの「観念」を意味しているということでは一致するが、その「観念」の内容は千差万別である。「羊をめぐる冒険」は、〈羊〉を探すという宝探しをすることで、歴史とそれを動かす核を引き出すことにその主眼があったと私は考える。〈羊〉が何を意味するのではなく、羊探しによって何が見えてきたのかということこそ重要視する立場である。

右翼や戦争を物語に入れることのこだわりには、こういった右傾化への危惧もあつたと考えられる。理念や思想が凍結したまま経済発展を続ける国家の方向には、保守勢力が大きく絡み、それが右傾化と繋がっていることに作家は自覚的であった。実際に、物語には近代化の持つ問題、戦後政治の権力構造、アジア蔑視の構図、マイノリティーへの侵略、戦争に対する批判等が描かれている。そして、村上はそういった何らかのへ価値観を武器にすることとを否定している。この姿勢が、一九八〇年代前半に対する最も厳しい批判であるかもしれない。それが他の宝探し作品群と異なる特徴であると思われる。

ただ一つ残された価値観、戦争に対するこだわりと、マイノリティーや弱いものの視点から〈歴史〉を紡ぎ直すことの必要性や重要性を示すこと。これが「羊をめぐる冒険」の方法であり、時代に絡め取られている作家の「抵抗のスタイル」の模索と捉えることは可能であろう。そしてそれは、様々な差異性の実態を見つめることで新たな「日本」の可能性を切り開こうとする「網野史学」に通じる点もある。再び右傾化が危惧される現在、この物語の構造・語りには再評価できる点があると思われる。

これまで述べてきたように、「羊をめぐる冒険」には社会や戦争への眼差しがあつた。村上の社会や歴史へのこういった眼差しは、後にノモンハンを題材とした「ねじまき鳥クロニクル」やサリン事件のインタビュ集「アンダーグラウンド」等に顕著に現れていく。更に早くに、処女短編「中国行きのスロウ・ボート」(昭55・4「海」)においても、在日中国人を題材にした社会意識が見られる。村上春樹の文学には、社会に対する問題意識や戦争批判をその骨格とする作品群がその一底流として流れているのである。

#### 注

(1) 「村上春樹の『風景』」(初出「海燕」平元・11・12、引用は「終焉をめぐる」平7・6、講談社学術文庫)

(2) 蓮實重彦氏は「僕」が〈羊〉を探す物語を「宝探し」の物語と位置づけ、同時代の井上ひさし「吉里吉里人」、丸谷才一「裏声で歌へ君が代」、村上龍「コインロッカー・ベイビーズ」、大江健三郎「同時代ゲーム」、中上健次「枯木灘」らが同様の「宝探し」の物語を描き出していると指摘した。特に村上の「羊をめぐる冒険」は「宝探し」の典型であり、物語の筋には独自性が見られなくと厳しく批判している(「小説から遠く離れて」平元・4、日本文芸社)。

(3) 坪井秀人氏は、「プログラムされた物語」(国文学 臨時増刊「平10・2」)において、次のように述べている。

「羊をめぐる冒険」が主に扱っている一九七八年は児玉が当事者の一人であるロッキード事件が起こって裁判が始まった時分に該当する。小説が発表された一九八二年八月の時点では東京地裁でいわゆる灰色高官らへの判決も下されていた。この事件を契機に児玉誓志夫を筆頭とする右翼や民族派、旧高級軍人らの戦中戦後における暗躍が再検討され、政治においては戦後の自民党長期政権のもとでの戦後政治

の腐敗が浮き彫りにされた時代であった。

(4) 小説の「先生」とその影の権力の継続を狙う黒服の秘書の形象は、敗戦後の占領期に始発しロッキードで膿を漏らし始めた、こうした戦後日本の構造的な権力の一元化を胡散臭いまでに表象化している。(中略) 作中人物の言葉を通して語られるこれらの言説は、対立を無化したポストモダン的な高度資本主義社会に到達する戦後日本の構造に向けられた確度の高い批評としてみなすことができる。

(5) 黒服の秘書の近代批判を掲げる。  
〔前略〕羊は国家レベルで米国から日本に輸入され、育成され、そして見捨てられた。それが羊だ。戦後オーストラリア及びニュージーランドのあいだで羊毛と羊肉が自由化されたことで、日本における羊育成のメリットは殆んどゼロになったんだ。可哀そうな動物だと思わないか？ まあいわば、日本の近代そのものだよ。  
しかしもちろん、私は君に日本の近代の空虚性について語ろうとしているわけじゃない。(後略) (第六章)

(6) 羊博士の秘書の近代批判を掲げる。  
「日本の近代の本質をなす愚劣さは、我々がアジア他民族との交流から何ひとつ学ばなかったことだ。羊のこともまた然り。日本における綿羊飼育の失敗はそれが単に羊毛・食肉の自足という観点からしか捉えられなかったところにある。生活レベルでの思想というものが欠如しておるんだ。時間を切り離した結論だけを効率よく盗みとろうとする。全てがそうだ。つまり地面に足がついていないんだ。戦争に負けるのも無理はないよ」(第七章)

(7) テッサ・モリス＝鈴木「辺境から眺める」(平12・7、みすず書房) 小笠原信之「アイヌ近現代史読本」(平13・7、緑風出版)、小川正人・山田伸一編「アイヌ民族 近代の記録」(平10・1、草風館)、「アイヌ史資料集4」(平元・5、北海道出版企画センター)、新谷行「増補アイヌ民族抵抗史」(昭52・7、三一書房)等を参照した。

(8) 「徴兵・軍隊とアイヌ教育」(平5・9「歴史学研究」)  
「風を歌を聴け」と「1973年のピンボール」では、分身は明らかに「鼠」であるが、「羊をめぐる冒険」では新しく「羊(羊男)」が提示され、それとともに「鼠」は行方不明になり、自殺してしまう。そして、「ダンス・ダンス・ダンス」では、はっきりと分身としての「羊(羊男)」が姿をあらわすのだ。と述べている。(作品の構造から)

村上春樹「平2・6『国文学』」

(9) 「反戦思想と徴兵忌避思想の系譜」(近代日本文化論10 戦争と軍隊) 平11・8、岩波書店

(10) 「徴兵忌避の研究」(昭53・1、立風書房)

(11) 「若い読者のための短編小説案内」(平9・10、文藝春秋)

(12) 村上春樹インタビュー「物語」のための冒険」(昭60・8「文学界」)

(13) 先行論文における〈羊〉の解釈

・「創作合評」(昭57・9「群像」) 日野啓三：弱さ、佐伯彰一：外国種のイデオロギー、佐々木基一：メシア的なもの

・川村二郎「文芸時評」(昭57・9「文芸」)：モンゴルの世界征服の権力意志

・川本三郎「村上春樹をめぐる解説」(昭57・9「文学界」)：全共闘世代を「より非現実の彼岸へと押しやった『革命思想』『自己否定』という『観念』」

・井口時男「伝達という出来事」(昭58・9「群像」)：羊の世界は「他者性」の象徴

・関井光男「〈羊〉はどこに消えたか」(昭60・3「国文学」)：西欧近代の文化の力を象徴していると同時に、日本近代の西欧化への意志を象徴

・笠井潔「都市感覚という隠蔽」(物語のウロボロス) 初刊昭63・5、筑摩書房、引用は平11・9、ちくま学芸文庫：観念的累積の〈悪〉  
・今井清人「羊をめぐる冒険」論(初出「文研論集」昭63・10、引用は「村上春樹—OFFの感覚—」平2・10、星雲社)：個人の輪郭を溶解する構造のまま膨張をつづける日本の近代の象徴

・柄谷行人「村上春樹の風景」(注1に同じ)：個を否定する観念に対する超越論的自己

(14) 網野善彦「日本論の視座」(平5・12、小学館ライブラリー)、「日本」をめぐる(平14・1、講談社) など。

(15) 拙稿「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』論「対社会意識の目覚め」」(平14・3「国文学」)